

虐待児症候群」された。この動きが日本で生じてから、まだ一〇年もたっていない。」（齋藤、二〇〇二、一三頁）という文章は一つの示唆を与えてくれる。

二五八

中国における「一人っ子」の 特徴と教育課題

孫 瑞

序 目 次

- 第一章 変形した教育心理―溺愛
 - 第一節 溺愛の背景―一人っ子の親の教育心理の形成
 - 第二節 溺愛の実態―甘やかされた世代
 - 第三節 溺愛の根源―「一人」の家庭構造
 - 第四節 溺愛の解決策―厳愛
 - 第二章 家長独裁主義下の教育手段―暴力
 - 第一節 伝統観念の負の遺産―家長独裁主義の固定化
 - 第二節 家長独裁主義下の教育環境の形成
 - 第三節 現実化した家庭内暴力への対策
 - 第三章 不平衡の教育傾向―受験教育対德育
 - 第一節 受験教育の実態
 - 第二節 見落とされた德育
 - 第三節 德育の方法と内容
 - 第四章 問題解決の模索―素質教育
 - 第一節 素質教育の提起
 - 第二節 真の素質教育を考える
- 終 章

序 章

一九七八年に中国政府が「一人っ子政策」(以下「」略)を基本国策として決めてから現在に至っているが、中国全土の一億二千万の家庭のうち、「一人っ子家庭」はすでにその二〇・七%を占めるようになった。二〇〇三年現在、「一人っ子」(以下「」略)はすでに八〇〇万人に上ったのである。人口増加を有効的に抑制した点からみれば、世界に大いに貢献した政策であると言えるものの、教育の面からみれば、一人っ子政策は実に古今未曾有の大実験であり、人類の教育に対する大きな挑戦でもあると言える。

一人っ子政策が実施された当初から、一人っ子によって構成された二一世紀の中国社会はどうなるのかという先行き不明な心配が、専門家らにあった。また、一人っ子政策に対する非難の多くは、子供に不良な個性、心理及び習慣を身に付けさせることが避けられないという点に集中している。一人っ子政策が実施されてから二五年経った現在、最も早く生まれた一人っ子たちはすでに幼児期や少年期を経て青年期に入った。では、彼らは一体どのような状況の中で青年期を過ごしているであろうか。筆者が二〇〇三年一月に、遼寧省撫順市で大学一年生一六九名を対象に行った(内、一人っ子と非一人っ子はそれぞれ一三四名と三五名である)調査の結果から、青年期の非一人っ子と比べ一人っ子をもつ特徴を以下のように把握することができよう。

- ・自己中心的意識が強いこと。
- ・孤独感や孤立感を感じやすいこと。
- ・同世代との接触に苦手であること。
- ・自立能力が低いこと。

成人を迎えた一人っ子にとって、これらの特徴はすでに彼らの性格の中に固着するようになった。筆者は、これら一人っ子の性格の特徴は、彼たちが長期に送った家庭生活と密接な関係を持つと考える。つまり、一人っ子政策は人口抑制を実現すると同時に、従来の中国社会を構成する家庭の構造を瓦解させ、そこで、一人っ子たちのこれらの性格の特徴を形成させることになったということである。さらに、二五年間にわたり一人っ子政策を徹底した結果、一人っ子という家庭構造が固定され、溺愛、暴力、「過教育」などの現象が社会化し、一連の社会問題の引き金となっている。

こうした環境の中で育てられた八千万人の一人っ子によって構成された二一世紀の中国社会は、今までと断然違うような性格をもつようになるに違いない。近代中国の思想家・梁啓超はその著書『少年中国説』の中で、子供の教育について次のように言及している。

「少年が強くなると国は強くなる、少年が弱くなると国が弱くなる」

つまり、子供の教育は一つの国家の未来を左右する決定的な要素である。とりわけ中国の現状から言えば、発展途上国として、現在、中国はちょうど社会転換期にある。いかに一人っ子を教育するかは

すでに中国の将来を左右する戦略的な問題となっている。さらに現実的に言えば、中国人口の一五%を占めるこの世代の教育問題を放置すれば、その潜在的な影響力は未来の四〇～五〇年の間に完全に爆発し、超大国中国に与える影響は実に想像のつかないものである。

未来への展望であろうか、現実への危機感であろうか、一言でいえば、一人っ子を如何に教育するかという研究は、中国にとって重要な意味をもつと考えられる。このような研究視点を原点に、本研究において、筆者は溺愛、暴力、過教育を代表とする一人っ子教育過程に現れた問題を分析することによって、その解決方策を探ってみたい。さらにこのプロセスを通して、日増しに一人っ子化する中国が社会転換期において取るべき教育方策について考察したいと考える。

第一章 変形した教育心理―溺愛

第一節 溺愛の背景―一人っ子の親の教育心理の形成

一九四九年の建国後、毛沢東の主導で人口増加が国策として進められた。一九五三年に実施された初めての人口統計の結果、人口が六億一九三万人（国外の華僑、留学生人口を含む）となり、予想より一億人以上も多かった^①。一九六六年に文化大革命（以下では、「文革」と略記する）が起これ、この出産ラッシュで生まれた世代のほとんどは、中央が呼びかけた「上山下郷」政策に応じて、農村や辺境地域に入り下放生活の中で二〇代を送った。一九七六年の文革の

終結を契機に、「文革世代」と言われた彼らの多くは都市に戻り漸く正常な生活を送るようになったものの、一人の子供しかつくれなと告げられたのである。極端な個人崇拜と熱狂的な理想主義の中から目覚めたばかりの文革世代の場合、まるで大きな病気が治ったばかりの患者が栄養補給に急いでいるように、文革後、彼らは人生への新たな希望と期待から精神的栄養を吸収することに懸命になる。そして、彼らにとって最も直接に実感できる「人生への新たな希望と期待」は他でもなく、まさにその子供である。こういった親としての文革世代の子育てに対する心理形成は、中国の一人っ子教育の諸問題を作り出した最大の要因であると考えられる。

第二節 溺愛の実態―甘やかされた世代

一九八三年三月一日、現代中国の「小皇帝」説ははじめてアメリカの週刊誌『NEWS WEEKLY』に取り上げられた。「小皇帝」と称したのは、一人っ子が家庭の中で皆からの愛を集めたという特殊な地位にいるからなのである。このような溺愛は一人っ子たちの成長を妨げる最大の要素であると考えられる。特に人格が形成される幼少期に溺愛を受けることによって、子供の心の中で過剰な自愛の心理と依存性が生じ、自ら生活の中で現れた問題を解決する思考力と行動力は育てにくくなる。一言でいえば、善意の溺愛は悪の結果を招くのである。二〇〇四年二月、筆者が遼寧省撫順市で行ったアンケート調査の結果によれば、親の庇護のもとに甘やかされながら

育てられた一人っ子の場合、通常の多くのきょうだいのいる子供と比べて、自立意識と能力の育成は遙かに遅れていることがわかった。つまり、一人っ子の親たちが苦勞して育てたのは、他でもなく、自立能力の低い「生活障害児」である。

第三章 溺愛の根源―「一人」の家庭構造

子供にとって家庭は、一つの小さな社会である。きょうだいの多い家庭の場合、子供は日々きょうだい間の競争と対立、また我慢と協力を体験することによって、相手がどう動くかまたそれに対し自分が如何に行動すべきか、無意識に相手の身になって考えることになる。いわば相手の立場に立って考える力と思いやりが自然に育てられる。このような通常の子育てのプロセスと対照的に、一人っ子家庭の場合、「一人」という家庭構造によって、協力性と競争性の育成は自然と欠如すると言わざるを得ない。「唯一の子供」として両親と祖父母よりも高い地位に置かれる中、自己中心の意識が無意識的に生じる。勿論、きょうだいの多い家庭において自己中心の意識の形成も可能である。更に、一人っ子をもつ中心的な地位は、家庭という特殊の環境の中でしか認められない。社会に入ると周囲に認められないため、行き詰ったり挫折したりするのは当然のことであろう。グループで挫折した結果、多くの一人っ子は自分だけの世界に閉じこもるようになり、不正常的の心理が病みつく人間性の形成は避けられ難いと考えられる。

中国における「一人っ子」の特徴と教育課題

第四節 溺愛の解決策―嚴愛

溺愛の温床である「一人」という家庭構造の影響力を最小限に抑えるため、子供で子供を教育する環境を作る必要がある。その第一歩として、まず家庭における一人っ子の地位を根本的に正す必要がある。いわば一人っ子を「小皇帝」の座から降ろして他の家庭メンバーと平等にさせることである。こうして、一人っ子家庭において子供にリードされる教育関係は、親が主導権を握る教育関係へと変えられる。そこで親は子供に家庭メンバーの一員として然るべき義務と権利を教え込むことがはじめて可能となる。さらに、子供に自分の力でできることを体験させることによって、子供は家庭に対して自分が果たすべき責任と義務を覚え、他人のために何かをしようという自他共存の意識を自然に育てる。こうして親が「嚴愛」の道に戻ることによって、一人っ子家庭の教育を危機から救うことがはじめて可能になると考えられる。

第二章 家長独裁主義下の教育手段―暴力

第一節 伝統觀念の負の遺産―家長独裁主義の固定化

家を大事にする家庭文化は、家長の独裁主義を助長する役目を果たしている。現在の一人っ子の親のほとんどは、こういった家長独裁主義の体験者である。筆者が二〇〇四年二月に撫順市で行った親子関係の調査の結果から、家長独裁主義は根強く一人っ子の親たちの意識の中に残され、体罰と子供の親に対する不満を引き起こす主

な原因であることがわかった。つまり、一人っ子政策の実施によってきょうだいの多い家庭構造が瓦解したものの、伝統の家長制度の支柱である家長独裁主義は依然として存在している。それゆえ、家長独裁主義下で育てられた一人っ子の親の場合、子育ての過程の中で子供に暴力をふるうこともある。さらに、家長制度の影響は「暴力」という表象だけにとどまらない。今回の調査結果をさらに深層的に分析してみれば、家長制度が中国人の育児理念に与えた影響は実に深遠なものであることがわかった。家長制度が伝統として守られた歴史の中で、家長独裁主義が当然のものとして中国の家庭のスタイルも固定されるようになった。いわば子供は親が教育を施した結果であり、家長がどれだけの教育を施すかは子供の将来を左右するという考えは通念として全社会に受け入れられている。そこで、子供が家長の作品として位置づけられ、自主的に成長することは不可能となっているのである。

第二節 家長独裁主義下の教育環境の形成

前述した親子関係の調査と同時に行われた「親がよく使う言葉」の調査の結果から、一人っ子家庭の中で、肯定式言語より否定式言語はよく親たちに用いられることがわかった。親から過度の否定と制限を受けることによって、子供の自主的な生存能力が次第に萎縮していき、権力者に諂う小胆な人間性が無意識的に形成されてしまう。さらに、こうした家庭教育の失敗がもたらした影響は全社会に

広がっていき、結局、民族性の低下を引き起こしかねない。一方、家長制度から最も直接影響を受けたものとして、一人っ子の親たちは、唯一の子供に「小皇帝」のような生活をさせると同時に、子供の行為に対する否定や制限を繰り返している。そこで、溺愛によって我がままになった子供の性格に手の施しようがないと感じる際、家長独裁主義下の成長の経験が主導的な働きをし、子供に暴力を振るうこととなる。つまり、一人っ子家庭における暴力現象は、伝統の観念—家長独裁主義が行き過ぎた親の本能—と溺愛との衝突した結果である。

第三節 現実化した家庭内暴力への対策

子供に健康的に成長する民主的な家庭環境を提供すると同時に、子供が間違いをおかした際、親は家長独裁主義を切り捨てて科学的な誘導を行う必要がある。心理学の角度からみれば、間違いをおかした際、子供は大体ある種の不安を抱えている。この不安は、自分の行動の結果やそれに対する親の反応への心配であると考えられる。このような子供の心理を活かし、親は「間違い」をきっかけに、子供に自己コントロールに必要な「恐怖心」を覚えさせ、また、間違いが改善される兆しが現れる際、タイムリーに褒めたり励ましたりすることが必要である。親からプラスの評価を受けると、子供は自分の行動が正しいと肯定し、努力し続ける自信がつく。そこで、間違いを繰り返さない心掛けが、はじめて正しいことをしようという

心理へと切り替わり、良い方向へ進むための自己コントロール力が身につけられる。

子供固有の天性を尊重する上で適切な「罰」と「賞」を施し、その天性をさらに引き出すことは、子供に備えるべき内なる精神を身につけさせるための根本的な道である。

第三章 不平衡の教育傾向―受験教育対徳育

第一節 受験教育の実態

一九八〇年代に入ってから、受験教育が密かにブームになり、今日に至って中国の子供教育の行方を左右する社会的問題となっている。筆者は二〇〇四年二月に撫順市清原第二中学校で中一の学生（二人っ子）の親一〇〇組を対象に行った調査の結果によれば、七〇％以上の一人っ子の親は、子育ての重心を勉強と進学に置き、子供の趣味、自立能力、交友能力の育成は軽視されていることがわかった。この調査と並行して撫順市清原第二中学校で中一の学生（一人っ子）一〇〇人を対象に行われた調査の結果から、約五〇％の子供は親に強いられた受験教育から大きな精神的ストレスを感じていることがわかった。つまり、受験教育という異常な教育手法によって、子供の心身の発育のプロセスはゆがめられ、正常で健康な成長ができなくなるということである。

第二節 見落とされた徳育

中国における「一人っ子」の特徴と教育課題

「改革開放」をきっかけに、一九八〇年代に入ってから中国社会が一気に学歴社会へと突入した。こういった社会的傾向を背景に、一人っ子家庭において教育の天秤のバランスが崩れはじめ、「具体的な知育」対「抽象的な徳育」という構図は日増しに際立つようになった。多くの親は子供の宿題から試験の問題や対策などまで具体的に指導できるのに、子供の道徳や品行の育成に関わる問題になると、上辺だけ淡々と言うことで済ませてしまったりする。このように徳育のスローガン化によって、「高知・低能」の現象は著しくなっている。いわば一人っ子家庭における知育と徳育の不平衡がもたらした影響はすでに現実的な形で現れ、中国社会の公徳の水準を低下させた重要な原因になったのである。

第三節 徳育の方法と内容

受験教育から脱出し平衡教育を実現するために最も重要なのは、親が教育者としての素質を向上させることである。そのため、筆者は以下の方法を提言する。①教育観念を改め、「学而仕則優」から子供の知能や個性の発展に適合させること。「人間教育」の教育理念へ転換すること。②教育者として親は、「言教」と「身教」の統一、即ち言行一致に心がけること。③親は親子との関係を正確に理解し、親子間の意識疎通を通じ、子供の要求または考えを把握すること。④子供の成長を研究する親になること。

また、一人っ子家庭における徳育は、その特有な背景があるため、

主に次の内容によって成り立つべきと筆者は考える。①責任感と義務感の教育、②勤労節約の教育、③法律の教育、④信用の教育、⑤理想と気概の教育。

第四章 問題解決の模索—素質教育

第一節 素質教育の提起

「高IQ低能力」をはじめとする教育問題の深刻さを認識し、中国は政府は学校を中心に素質教育という教育改革政策を打ち出した。しかし、政府が主導する実施過程を具体的に分析してみれば、素質教育は複線型学校体系を活かし大量の熟練労働者と中級技術者養成のための教育理論として定位されたことがわかった。こういった動向の中で、中国の素質教育の妥当性が厳しく問われることは避けられなくなる。

第二節 真の素質教育を考える

子供が道具ではなく健全な人間性をもつ人間になるのは、その独立する人格、意識と生存能力が次第に発展することの結果である。これはいわば素質教育の根本的な目標であろう。そのため、中国の一人っ子教育は革命的な転換を果たさなければならない。そしてこの転換の第一歩として、現在、中国の素質教育は「学校が中心」から「家庭が土台」へと転換すべきであると筆者は考える。なぜなら、単なる学校を中心に素質教育を行うと、子供が家に帰るとまだ親に

統治される環境に戻り、そこで個性は再び抑えられることになりかねない。親に子供の個性を尊重することの重要性を認識させるのは中国の素質教育の第一歩である。それから、学校は家庭に協力する立場から、教学の内容と方法の面で調整しなければならない。こうして家庭教育と同時に学校教育も素質教育へと転換してはじめて、健康的な個性と素質を兼ね備える人材の育成が可能になると考えられる。

終 章

一体、中国における一人っ子の特徴と教育課題はどのような内実に伴われるものであるか、また、その対応に追われている我々はどうのような解決策を取るべきであろうか。こういった問題意識に基づき、本研究は筆者が遼寧省撫順市を中心に行った現地調査を土台に展開された。その結果として、溺愛、暴力、知育と徳育の不均衡は、すでに中国の一人っ子教育の発展を阻む深刻な問題となったことがわかった。一方、これらの問題を解決するために、近年来、中国政府は素質教育という教育改革政策を打ち出したが、職業に求められる素質をもつ人材の育成を目標と設定したため、この政策は一人っ子教育の問題の解決に繋がらないと言わざるを得ない。

では、どうすれば問題を解決できるのであるか。そのため、まず、教育が何のためにまた何を中心に行われるべきかという根本的問題に関する、政府や一人っ子の親が持っている誤った認識を正す

必要があると筆者は考える。

子供の教育とは、子供を中心にその自己向上力を育成するためのものである。親をはじめとする教育者の役割は不可欠なものであるが、それは子供に自由に成長できる環境を提供することを中心とするものであろう。親が自分を中心とする教育を施すと、子供は個性を失い、従って創造力も失い、社会に適応できない人間になってしまふのである。こうした途方に暮れた教育から子供を救うには、一人っ子の親にとって、子供を解放するほかに道がない。つまり、子供に子供の世界を返し、広々とする心や長い目で彼らが自分の内なる理想に従って成長することを見守ることである。

子供が本当に人間らしく有意義な生活を送ることができるよう助けるのが、親が成すべき真の教育である。本研究が、子育てに悩まされる一人っ子の親をはじめとする教育の義務を担う中国社会の人々が、健全な人間性のもつ子供を育成することに繋がることのできれば幸いと考える。

注

- ① 若林敬子『中国人口超大国のゆくえ』岩波新書、一九九四年、四九頁。

戦後真宗史の研究

赤 渕 淳

目 次

序 論

第一章 戦時下の教団形成

第一節 天皇制国家体制の宗教政策

第二節 「神道国教化」を成立させた真宗理解

第三節 戦時下の教団

第二章 敗戦後の教団

第一節 戦後直後の教団

第二節 教団の靖国神社国家護持法案への反対

第三節 「靖国法案」以後の教団

序 論

本論文で扱う戦後真宗史とは、浄土真宗本願寺派教団（以後教団と略す）の戦後史である。戦後において教団の戦争参加とその戦争責任が問題にされたことはあったが、ただ戦争状況にあった当時の教団を今の立場から非難すること、現在の価値観から過去を糾弾することでは意味がない。重要なのは、なぜあの時教団は戦争協力をすることができたのかという点をあきらかにし、自らが非戦の立場